

「ヨーロッパ文化研究」

【第43集】		2024年3月 発行
有田 英也	ナチ強制移送者像に見る歴史、証言、小説の入り組み—— オルガ・ヴォルムセル＝ミゴ『連合軍が収容所の扉を開いたとき』(1965)を巡って	
木畑 和子	ベラルーシ断想	
下田 和宣	歴史的な真空恐怖—— ブルーメンベルクの「哲学者の神の過剰」について	
高名 康文	パストゥレルにおける人間性と動物性	
中野 智世	匿名の集団から名前と顔のある個人へ—— ナチ・ドイツによる「安楽死」犠牲者の記録・記憶・追悼	
【第42集】		2023年3月 発行
有田 英也	献辞	
末永 朱胤	末永朱胤教授 略歴および研究業績	
Kenji Kitayama	Marcel Duchamp avec les Machines Mariée-Célibataires : une ombre de Raymond Roussel I	
有田 英也	言語・歴史・性—— アシア・ジェバールの『愛、ファンタジア』『父の家に居場所なく』における個人的な事情の再話	
下田 和宣	哲学的言語の克服されざる根本要素としてのメタファー ——ブルーメンベルク「メタファー学のテーゼ」講演について	
滝沢 明子	ロラン・バルト『明るい部屋』のなかのボードレール「現代の公衆と写真」——「驚き」と「ヌーメン」	
時田 郁子	自動人形の言葉——E.T.A. ホフマン『砂男』	
明星 聖子 二藤 拓人 森林 駿介	「グルーバツハ夫人」・「最初の審理」・「人気のない法廷」の執筆順推定をめぐる中間報告——カフカ『審判／訴訟』の編集・翻訳プロジェクト	
村瀬 鋼	他我の現象学と存在論——アンリとレヴィナスから	
【第41集】		2022年3月 発行
末永 朱胤	献辞	
	略歴および研究業績	
Kenji Kitayama	Quelle est la sensation qui vit à la fois un dehors et un dedans chez Masaharu Sato ?	
黒崎 宏	定年退職について	
下田 和宣	文化の悲劇 ——ジンメルとカッシーラーをめぐる文化哲学的思考の分水嶺	
末永 朱胤	(エッセイ)言語にとりソーシャルディスタンスとは何か	
滝沢 明子	ロラン・バルトのギリシア ——官能の果実——	
時田 郁子	『黄金の壺』 ——E.T.A. ホフマンの変奏	
町田 健	西洋古典語	
村瀬 鋼	他人の現出と存在 ——レヴィナスを参照しつつ	
【第40集】		2021年3月 発行
末永 朱胤	追悼	

	富山典彦先生 略歴・著作目録
富山 侑美	(エッセイ) Die Verwandlung und Das Aufheben
戸部 順一	富山典彦先生のこと
陶久 明日香	(エッセイ) 記憶と嗅覚、そして天才 ——P. ジュースキント『香水』を読む
高名 康文	富山典彦先生の生徒と「赤ずきん」を読む ——2020 年前期「比較文化演習a」の授業報告
北山 研二	《 Surprise dans le quotidien chez Rohmer, Ozu et Kore-eda 》
時田 郁子	クライスト『ハイルブロンのかートヒェン』の夢
ベンヤミン・ツィーマン 著 中野 智世 訳	抗議、計画、参加 —— 1968 年以降のドイツ連邦共和国におけるカトリック教徒
有田 英也	(研究ノート)「巣穴」の獣の見る夢 ——仏文学徒のカフカ論
村瀬 鋼	人の存在と人の死
【第39集】	2020年3月 発行
村瀬 鋼	献辞
	北山研二教授 略歴・研究歴
北山 研二	鮮明なショットと不鮮明なショットが織りなすベケットの『フィルム』とは
荒木 善太	4つの窓のある風景 ——熱帯の「湖畔の庭」をめぐって
倉方 健作	詩人たちのリュクサンブール公園
高名 康文	『狐物語』と『フォヴェール物語』における人間/動物/仮面
伊藤 由利子	バルザック『人間喜劇』における「社会的種」とは ——『毬打つ猫の店』の看板の解釈を通して
沖久 真鈴	動物/人間/仮面 ——『人間喜劇』という名の動物園へ——
有田 英也	雲居の貴婦人 ——ジャン・コクトーのベル・エポック回想記に見るモード観と思春期像
富山 典彦	ベルトーフ『子供のための絵本』にみる「人間」とその文化(1)
村瀬 鋼	ジュール・ルキエにおけるスピノザの影 ——ルヌヴィエを媒介に
【第38集】	2019年3月 発行
有田 英也	アンドレ・ジッド『一粒の麦もし死なずば』におけるノによる魂の救済をめぐって
北山 研二	デュシャンの企画展覧会はアートなのか
高名 康文	『新版ルナール』と『アーサー王の死』における運命の女神
時田 郁子	ホムンクルスの秘密 ——ゲーテ『ファウスト』第二部第二幕
中野 智世	ナチ体制下のドイツにおけるカトリック・カリタス ——共存と抵抗のあいだで
【第37集】	2018年3月 発行
有田 英也	もうひとつのポストコロニアル文学——アルベール・メンミの初期小説に見る族外婚
北山 研二	どのようにアートは受容されるのだろうか

ガブリエーレ・ディーツェ 陶久 明日香 訳	女 刑 事——ドイツのメディアにおける経歴
高名 康文	『マントのレー』における「誠実」という語の使用例——「大切なこと」は言葉で語られるのか？
時田 郁子	怪物と移動——格林メルスハウゼン『ドイツの冒険者ジンプリチムス』
富山 典彦	ベルトーフ『子供のための絵本』に描かれた自然(1) ——19世紀前半のワイマル公国における幼児教育についての考察
【第36集】	2017年3月 発行
ドミニク・シャトー	シュルレアリスム美学と一般美学
北山 研二	Un inframince en excès ou une pluralisation de l'espace quotidien ——Trois tentatives, trois artistes japonais Yayoï Kusama, Chiharu Shiota et Masaharu Sato.
時田 都子	ドイツ革命と黒い光 ——デーブリーンの『一九一八年十一月』
有田 英也	リシャルド・ミエ『純なひとローヴ』の主題と語り ——故郷・国語・多文化主義
陶久 明日香	通訳の現象学の試論 ——翻訳との比較をもとに
富山 典彦	華麗なるハプスブルク帝国——その永遠の光芒(五) フランツ一世と喪服の「女帝」
中野 智世	「瓦礫の社会」と宗教的セーフティネット ——占領下ドイツ(一九四五—一九四九)におけるカトリック・カリタスの救援活
【第35集】	2016年3月 発行
北山 研二	La frontière de la langue est-elle identique à celle de l'art ?
時田 郁子	『クラバート』の魔法
富山 典彦	ソーマ・モルゲンシュテルン『放蕩息子の遺書』 ——コウトリとガリチアのユダヤ人
富山 典彦	華麗なるハプスブルク帝国 その永遠の光芒(一) 皇帝ヨーゼフ一世と二人の娘た
【第34集】	2015年3月 発行
	高木昌史教授 略歴および研究業績
高木 昌史	成城大学、思い出の記
黒崎 宏	ライブニッツ試論 ——原子論(アトミズム)から单子論(モナドロジー)へ——
有田 英也	怪盗モディアノ ——『エトワール広場』(1968)の模倣と引用
北山 研二	見せるアートと見せないアート ——クリストの梱包アートについて
高名 康文	『狐物語』B写本第5921-22 行を巡る新旧校訂の比較
ジュール・ルキエ 村瀬 鋼 訳	体系スケッチ
富山 典彦	ロマンティッシュ・イロニーの謎？ ——高木昌史教授定年退職に寄せて
エルヴィン・パフスキー 高木 昌史 訳	ラファエロの「騎士の夢」とそのゼバスティアン・ブランド『愚者の船』に対する関係
エルヴィン・パフスキー 高木 昌史 訳	アルブレヒト・デューラーの銅版画「ヘラクレス」
【第33集】	2014年3月 発行
林田 伸一	献辞
木畑 和子	私が出会った人々
荒畑 靖宏	フレーゲの「形而上学」と「方法」 ——汎論理主義と解明——
有田 英也	ジョナサン・リテル『慈しみの女神たち』翻訳後記 ——あるいは虚構に倫理を見出しがたいこと
北山 研二	新しい知覚概念・新しい対象着想法としてのアンフランクスとは
Dominique Chateau	L'autoportrait entre le moi réel et le moi imaginaire

高名 康文	『パレルモのギョーム』と『狐物語』 —ジャンルのパロディーについての一考察—
富山 典彦 村瀬 鋼	ラファエロの「騎士の夢」とそのゼバスティアン・ブラント『愚者の船』に対する関 [研究ノート] 恋愛の哲学へのアプローチ
エルヴィン・パノフスキー著 高木 昌史 訳	ティツィアーノの「聖愛と俗愛」の解釈に寄せて
【第32集】	2013年3月 発行
Kenji KITAYAMA 荒畑 靖宏	L' art en excès アスペクトの恒常性と脆さ —ウイトゲンシュタインとハイデガー—
高木 昌史	エルヴィン・パノフスキー「束縛されたエロス」 —レンブラントの「ダナー」の系譜学に寄せて—
【第31集】	2012年3月 発行
富山 典彦	ハプスブルク帝国と辺境 —ソーマ・モルゲンシュテルン『放蕩息子の息子』の風景—
戸部 順一 有田 英也	アリストパネス喜劇の外国人 生の記述としての伝記と自伝 —戦争と強制収容の20世紀を振り返る—
北山 研二	風景の虚構化または虚構の風景化 —自然風景画と都市風景画について—
高名 康文	ソルデル、ベルトラン・ダラマン、ペイレ・ブレモン・リカス・ノヴァスによるブラ カッツ殿に捧げる哀悼歌(planh)三篇(翻訳)
高木 昌史	「エウロペの誘拐」 —文学と絵画—
【第30集】	2011年3月 発行
北山 研二	献辞
一之瀬 正興 有田 英也	ドン・ジュアン劇の登場人物の塑造 〈ベル・エポック〉の幼年時代の文学的回想における観劇 —コクトー、レリス、サルトル—
北山 研二 末永 朱胤	アントナン・アルトーの自画像または他者の風景の解体(1) ソーシャルの記号概念と聴き手の立場 —記号の図の矢印について(1)
高木 昌史	グリム兄弟とペロー童話 —口承と書承の狭間で—
戸部 順一	「着る」のか「脱ぐ」のか? —アリストパネス作『女の平和』645 行の読みについて
村瀬 鋼	[研究ノート] 世界のドラマと恋愛
林田 伸一	フランス絶対王政期における地方長官補佐について —アンジェ管区を中心に—(二・完)
【第29集】	2010年3月 発行
荒畑 靖宏	届かぬ指示、揺れる解釈 —パトナム、ダメット、クリプキ、そしてウイトゲンシュタイン—
有田 英也	「解放」されたイスラエル —エマニュエル・レヴィナスのファシズム論と同化論
Kenji KITAYAMA	Qu'est-ce que le japonisme ? Le japonisme était-il une révolution esthétique ou un commencement de la mondialisation esthétique ?
村瀬 鋼	「らしさ」概念の射程 (La portée philosophique du concept de <<Rashi-sa>>)
【第28集】	2009年3月 発行
池田 喬	志向性・語り・行為—ハイデガーの現象学的行為論—
北山 研二 富山 典彦	写真または他者の映像 エルンスト・ヴァイス『貴族』における一人称の語り手 —他者の風景のなかで
【第27集】	2008年3月 発行

北山 研二	献辞
横塚 祥隆	フリードリヒ・シュペーのこと(2)－善き牧者－
戸部 順一	ゆりの声
富山 典彦	アントン・ヴァルトガンスの聖書劇三部作 －新生オーストリアと未完のライフワーク
Kenji KITAYAMA	Voir, entendre, sentir et imaginer chez Marcel Duchamp －le visible avec l'invisible
高木 昌史	横塚さんの学問－最近の仕事から－
富山 典彦	横塚先生の最終講義－Memento MoriとCarpe Diem－
林田 伸一	フランス絶対王政期における地方長官補佐の権限と特任状
【第26集】	2007年3月 発行
北山 研二	『新アフリカの印象』のパラドクス 2 －『新アフリカの印象』の生成過程をめぐって
有田 英也	ジャン＝ポール・サルトル著『ユダヤ人問題の考察』における「われわれ」の位相
村瀬 鋼	ジュール・ルキエの「クマシデの葉」－翻訳と註釈
【第25集】	2006年3月 発行
富山 典彦	エルンスト・ヴァイスのバルザック小説『真夜中の男たち』 －現実と虚構のはざままで
有田 英也	民族史と現代史のはざまの回想(2) ～ジゼル・アリミ『フリトゥナ』における再話について
北山 研二	『新アフリカの印象』のパラドクス －『新アフリカの印象』の生成過程をめぐって
【第24集】	2005年3月 発行
富山 典彦	ハプスブルク帝国における辺境と「神話」の影 －二重君主国における言語と文化の二重性
有田 英也	民族史と現代史のはざまの回想(1) ～ジゼル・アリミ(Gisèle Halimi)『オレンジの樹の乳』をめぐって
林田 伸一	フランス絶対王政期の地方長官補佐について －アンジェ管区を中心に(一)－
【第23集】	2004年3月 発行
一之瀬 正興	献辞
新井 恵雄	ヤスパースにおける限界の概念
村瀬 鋼	<私>の生から眺められた環境について －風景としての生と環境のなかの他者－
高木 昌史	ヘルダーリンのポルドー紀行
有田 英也	幼年期の言語使用にもとづく世界の再神秘化 ～ミシェル・レリスの自伝四部作『ゲームの規則』～
KITAYAMA Kenji	Hijikata, un autre Artaud ou un autre qu'Artaud
【第22集】	2003年3月 発行
横塚 祥隆	献辞
西 節夫	バルザックとベリー公妃の反乱 －Balzac et le soulèvement de la duchesse de Berry－
高木 昌史	F・シュレーゲルのフランス紀行－>Europa<像の成立－
木畑 和子	第三帝国期の予防医学－レオナルド・コンティを中心に－
戸部 順一	恐ろしいのは誰だ？ －アイスキュロス作『エウメニデース』416行について－
富山 典彦	アントン・ヴァルトガンスの「世紀末ウイーン」 －Musik der Kindheit. Ein Heimatbuch aus Wien (1928)より－
林田 伸一	フランス近世都市における「寡頭支配」について
村瀬 鋼	<私>のなかの間隙－ジュール・ルキエと現代哲学－
Kenji KITAYAMA	L'écriture avec l'indicible chez Raymond Roussel
【第21集】	2002年3月 発行
西 節夫	バ・メーヌの初期ふくろう党像をめぐって Autour des figures des premiers Chouans du Bas-Maine
富山 典彦	オーストリアの詩人アントン・ヴァルトガンスの栄光と挫折 －ドイツとオーストリアのはざままで

戸部 順一	euphemeinの構築する世界 アリストパネスにおける儀式的構造の意味
村瀬 鋼	「私」を言うことの意味 ーデカルト『省察』でのコギトと他者
横塚 祥隆	フリードリヒ・シュペーのこと(1) 東洋宣教に憧れたイエズス会士
	「ヨーロッパ文化研究」第1集～第20集総目次
【第20集】	2001年3月 発行
有田 英也	後期ドリュ・ラ・ロシェル像の確定に向けて
北山 研二	レーモン・ルーセルの演劇性
【第19集】	2000年3月 発行
富山 典彦	“Blitzdichter” Karl Farkas の誕生 ーウィーンのカバレティスト列伝(1)
有田 英也	言いえないドレフス事件 ～『失われた時を求めて』への社会批評的アプローチ
Gerog Simmel 濱川 祥枝(訳)	女性文化(Weibliche Kultur)
【第18集】	1999年3月 発行
新井 恵雄	献辞
横塚 祥隆	ル・フォール『コンソラータ』をめぐって
富山 典彦	Mariä Himmelfahrt im Sonnenschein, gibt es reichlich guten Wein. ー『シュタイアーマルクの農民暦』にみるオーストリア人の季節感についてー
登張 正實	ノヴァーリス『ハインリヒ・フォン・オプターディンゲン』(『青い花』)試論(六)
北山 研二	デュシャンとその蝶番
小松崎 直	個体と全体ーホーフマンスタール>>世界小劇場<<の問題ー
有田 英也	イスラエリットの歴史(1806-1905) (下)
末永 朱胤	ラングとララング ーソシュールとラカンにおける言語概念と記号の恣意性ー
【第17集】	1998年3月 発行
千葉 治男	ジャック・プーシェの業績ー忘れられた碩学の遺産(三)ー
横塚 祥隆	ハインリヒ・マンと国内亡命文学
戸部 順一	アリストパネスにおける“TERAS”の意味
ICHINOSE Masaoki	Les valets dans la comédie classique française et Tarôkaja dans le Kyôgen ーUne comparaison théâtrale franco-japonaiseー
有田 英也	イスラエリットの歴史(1806-1905) (上)
【第16集】	1997年3月 発行
千葉 治男	ジャック・プーシェの業績ー忘れられた碩学の遺産(二)ー
登張 正實	ノヴァーリス『ハインリヒ・フォン・オプターディンゲン』(『青い花』)試論(五)
戸部 順一	アリストパネスの悲劇批判(その2) ー『女だけの祭』における女衣裳ー
【第15集】	1996年3月 発行
千葉 治男	ジャック・プーシェの業績ー忘れられた碩学の遺産(一)ー
町田 健	フランス語の冠詞の意味
西 節夫	『ショレの赤いハンカチ』由来考(II) ー付 Th.Botrel et P.d'Anjou: Le mouchoir rouge, episode de la Chouannerie 1793 (Drame en 1 acte)ー
【第14集】	1995年3月 発行
千葉 治男	知識人のフランス革命 ージャック・プーシェの場合ー(二)革命のなかへ(完了)
戸部 順一	リュストラテの正体 ーΠΕΚΤΟΥΜΕΝΟΝの意味をめぐってー
一之瀬 正興	「女房学校論争」をめぐって(その2) ー『ゼランド、または女房学校真の批判』についてー
【第13集】	1994年3月 発行
成瀬 治	献辞
濱川 祥枝	レーナ・クリストのこと(VII)(承前)

千葉 治男	知識人のフランス革命 ージャック・プーシェの場合(一)ー革命思想の形成
横塚 祥隆	アルブレヒト・ハウスホーファ『モアビート・ソネット集』管見
逸身 喜一郎	女神と人間のあいだに生まれた子供たち
黒崎 宏	後期ウイトゲンシュタインに何を学ぶかー事象から文法へー
西 節夫	『ショレの赤いハンカチ』由来考(Ⅰ)
一之瀬 正興	「女房学校論争」をめぐる(その1)ー『女房学校批判』についてー
有田 英也	ワイマールへの旅 ー1941年11月第1回ヨーロッパ作家会議についての覚え書きー
【第12集】	1993年3月 発行
濱川 祥枝	レーナ・クリストのこと(VI)(承前)
町田 健	フランス語の時制・アスペクト・動作態
黒崎 宏	ウイトゲンシュタインの『哲学的探究』を読むー「規則」に係わる部分ー
【第11集】	1992年3月 発行
濱川 祥枝	レーナ・クリストのこと(V)(承前)
有田 英也	音楽とテキストーエリック・サティの音楽論をめぐるー考察ー
黒崎 宏	ウイトゲンシュタインの『哲学的探究』を読むー私的言語に係わる部分ー
【第10集】	1991年3月 発行
山田 壽	『葉陰の劇』に見る二つの愛
千葉 治男	フランス体系百科全書とパンクーク
逸身 喜一郎	中・後期エウリーピデースの趣向
黒崎 宏	ウイトゲンシュタインのパラドックスー『探究』の第二〇一節をめぐるー
一之瀬 正興	美女と野獣ーアニェス・ニンフェットとアルノルフ・グロテスクー
西浦 禎子	「青ひげの城」ー《禁室》の象徴体系をめぐるー
【第9集】	1990年3月 発行
濱川 祥枝	レーナ・クリストのこと(IV)(承前)
西 節夫	ガレルヌの彷徨を追って ーラ・ロシュジャクラン侯爵夫人『回想録』抄ー
磯部 万里	フローベール作『ボヴァリー夫人』 ー農事共進会における交互進行のことばー
【第8集】	1989年3月 発行
濱川 祥枝	レーナ・クリストのこと(III)(承前)
登張 正實	ノヴァーリス『ハインリヒ・フォン・オプターディンゲン』(『青い花』)試論(三)
【第7集】	1988年3月 発行
登張 正實	ノヴァーリス『ハインリヒ・フォン・オプターディンゲン』(『青い花』)試論(二)
舟越 清	科学とヨーロッパのキリスト教的世界像(二) ー十六・十七世紀の学術研究と新しいコスモスの創造ー
濱川 祥枝	レーナ・クリストのこと(II)(承前)
一之瀬 正興	亭主像の諸相ースガナレル像の変貌
逸身 喜一郎	エウリピデースの語法(1)
【第6集】	1987年3月 発行
山田 壽	献辞
登張 正實	ノヴァーリス『ハインリヒ・フォン・オプターディンゲン』(『青い花』)試論(一)
濱川 祥枝	レーナ・クリストのこと(I)
横塚 祥隆	「国内亡命文学」試論
逸身 喜一郎	『オイディプス王』ノート
登張 正實	登張正實教授略歴および主要業績目録
【第5集】	1985年3月 発行
登張 正實	ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』試論(四)
西 節夫	バルザック『呪われた子』覚書(二)ー愛のテーマをめぐるー
舟越 清	科学とヨーロッパのキリスト教的世界像(一) ー十九世紀末のドイツ文学とニーチェの宗教観・序ー
【第4集】	1984年3月 発行
登張 正實	ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』試論(三)
西 節夫	バルザック『呪われた子』覚書(一)ー愛のテーマをめぐるー

舟越 清	ニーチェと十九世紀後半のドイツの状況 II －十九世紀転換期の近代自然科学者に見る内的世界の構造の変化－
【第3集】	1983年3月 発行
登張 正實	ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』試論(二)
舟越 清	ニーチェと十九世紀後半のドイツの状況 I
【第2集】	1982年3月 発行
亀井 孝	HABENT SUA FATA EXEMPLA
登張 正實	ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』試論(一)
西 節夫	バルザック『谷間の百合』覚書
【第1集】	1981年3月 発行
尾崎 和郎	ゾラと〈田舎地主議会 Assemblée rurale〉
千葉 治男	塩税と密売－塩のフランス史研究試論－
横塚 祥隆	夜を通る暗い道 －ラインホルト・シュナイダーの闘い－